

晦日月 川村龍俊

レコードに針を落とす  
学生時代に何百回もきいたうた  
その歌手は今でも唄っているのかな  
眼鏡の裏でなみだが溢れる

しなければならぬことなど  
腹の底から湧きあがつてきたためしがないが  
つとめにも出ているしはたけにも出ているし  
妻はまるい顔をしてうまに跨り外国へ飛ぶ  
ときには舞ったり謡ったり  
額がうしろへ伸びたその日  
いとやんごとなきひとのむすめが  
母校に入学すると知った

ヴァイオリンを教えなければ  
つとめをやめはたけをうり  
妻と永久の別れを誓い  
母校へ母校へ母校へと

一足早く細長い顔の女がそこに居て  
チューバを教える話が決まっていた  
あのお、ヴァイオリンも是非  
よきにはからえ

ヴァイオリンは上達しそうになかったが  
母校のそこかしこには昔の妻のうまがいて  
あきらめる気なんかさらさらない

チューバもぜんぜん吹けないけれど  
細長い顔の女の髪は腰まで長く黒くて  
むずがる気配はさっぱりない

ああすばらしきかないとやんごとなきひとのむすめ  
その歌手なら八年前に死んでいて  
と差出人のない葉書をくれたのは

君か  
そうよ